蘇芳集

何処からか

青山　丈

藤棚の下を出てから空を見る
風船を手放した児と立つてゐる
水足した分だけの浮く水中花
でで虫は知らぬ処へ置いてくる
昼顔の花のどれにも手が届く
何処からか帰つて来ても黐の花
母の日の外のカレーを食べてきた

一切

木内憲子

一切が吹かれてゐたる芽吹山
日輪のはつきりすれば紫木蓮
春林を出でしばかりの水迅り
山吹や漢無口に動くべし
椿寿忌の椿もつとも赤からう
春日の書架に余れるものを積む
何読んでゐても蛙の目借時

頭巾

小島　みつ如

外出着のみな身に合はぬ花ふぶき
裾長く白雲まとひ春の富士
夜の車窓春満天の星潤む
イヌシデの新緑明り娘の養生（娘ピースホームへ）
新緑蔭従姉妹再従兄弟が集ひけり
皐月燃ゆ命のかぎりよく笑ひ
お地蔵の頭巾縮緬風光る

靴投げて

清水裕子

桜餅買ふ列にゐて独り者
紅梅にいささかの酔ひ歳おぼろ
綿菓子に色の生れたる春の昼
野の卓を木椅子が囲む花満開
花の香に溺れて人を許すかな
噴水の亦の不揃ひ雨催ひ
靴投げて土手の青さを踏みにけり

初蝶

下平直子

初蝶と見遣れば草の揺るるのみ
ひと雨に森青臭し鳥の恋
鶯の鳴くほどに森ふくらめり
垣越に牡丹を覗く郵便夫
回覧板届け牡丹の客となる
誰彼に今日の青空チューリップ
春愁やころころ笑ふ人とゐて

指冷えて

冨田正吉

指冷えて来るまで椿見てゐたり
細目して雨の椿をとらへけり
今生も吾も椿も一度きり
まなうらの椿消さむと首振れり
メロンパン椿の前で粉こぼす
眠たくて曖昧となる椿かな
椿見し夜はよく効く貼薬

羽抜鳥

野路斉子

跳んでとんで坂を玩具に燕の子
カーネーション貰ふ継母も五十年
カーネーション貰つて母と子となりぬ
登校に急ぐ黄傘も梅雨に入る
長過ぎるパジャマのズボン羽抜鳥
斯うしてはゐられぬ暑さ誕生日
夏紅葉記憶の景をそのままに

仏生会

別府　優

囀の出掛けの暇を囃さるる
だんご屋の角を曲がると仏生会
電線を入れて並木の残花かな
爪立てばまだ藤房に手の届く
啄木忌路地の傾斜を抜けもして
つばくらや酒樓の甕の口ふるび
八重桜せかせかとして暮れにけり

歩をつぐ

前田　陶代子

雪柳揺れては影をあたらしく
対岸の近きと思ふ花のころ
満開の花の真下といふ冥さ
み社へ歩をつぐ桜吹雪かな
掃き残る落花に色のなかりけり
若葦を渡りし風のひといろに
湖へ向く大きな玻璃戸鳥帰る

緑立つ

松原　ふみ子

新駅の広場ととのふ花水木
花すみれ山荘はまだ閉されて
散る花や蛇行ゆたかに最上川
山吹は黄によろづ屋はコンビニに
小満や荒草は丈競ひつつ
辻説法跡ひろびろと緑立つ
鎌倉に星の井古りぬ著莪の花

亀鳴く

峰岸　よし子

蒼天を翔る落花のひとしきり
夜へしばし間のある水音花疲れ
だしぬけに薬缶笛吹く四月馬鹿
八十八夜きれいに残す魚の骨
しやぼん玉空の青さを包みこみ
歩を止めてをり鶯のつぎのこゑ
千金の宵とて亀の鳴きにけり

ももさくら

宮尾直美

師系みな長寿なりける風生忌
初蝶は風ともなひて子安堂
ひよいと来て話の尽きぬ草の餅
人の世は逢うて別れてももさくら
喪ごころの春の渚の影法師
夜更けまで何やかやとて遠蛙
ゆく春や抱へて細き膝頭

青は海

八木下末黒

どの色にしようか店のチューリップ
また一つ歳をかさねる万愚節
光太郎忌や波音の九十九里
薪の火に蒸籠据ゑる花まつり
落ちてくる雲雀ひとつぶ九十九里
啄木忌矢車草の青は海
永き日やポスト黄色の家がある

菖蒲鬘

吉田幸敏

眩しすぎないか山吹の雨しづく
雲ひとつなくて八十八夜かな
廃れ田の水口あたり田螺鳴く
なき人の田に水を張る知らぬ顔
花は葉に力餅屋は覗くだけ
父も子も湯殿の菖蒲鬘かな
マロニエの咲く金町や人に会ふ

雨の街

小川美知子

スリッパを足で引き寄す花の雨
一面の落花を鳩の通りけり
雨降れば雨の力の著莪の花
忙しいことの楽しいチューリップ
書き了へて封をするとき霞草
曲がりたい角を曲がると春の暮
ゆく春の雨の森出て雨の街